

個人や集団の変容にむけた効果的な対話の場づくりの3要素

3-factors of an effective dialogue for individuals and group transformation

中村 一浩, 保井 俊之, 前野 隆司
 Kazuhiro NAKAMURA, Toshiyuki YASUI, Takashi MAENO
 慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
 Graduate School of System Design and Management, Keio University
 Email: n-kazuhi@keio.jp

あらまし：知識の創造やコミュニティの形成、新しい事業の創出には、そこに関わる個人や集団の変容が重要となる。本研究では、変容を起こす手法として近年注目を集めている対話（ダイアログ）について、より効果的な場づくりを行うための3要素、①対話の対象となる素材（Material）、②対話における発話の方法（Method）、③対話の場に臨む態度（Mindset）、を明らかにし、提案した。

キーワード：対話、ダイアログ、知識創造、自己変容、場づくり

1. 研究概要

ソーシャルイノベーションの実現を目的として、2015年より長野県小布施町において「小布施インキュベーションキャンプ（OIC）」を実施している。これは全7セッション4か月からなるプログラムで、10名程度の参加者が対話を通じて相互に深い交流をし、互いのビジョンを共有しながら思念を熟成させ、新しい価値を持つ商品やサービスを生み出すことを目標とする協創のプロセスである⁽¹⁾。

新しい商品やサービスの創出が最終目標ではあるが、起点となるのは個々人の自己変容であり、これは学習プロセスに他ならない。本研究では、OICでの実践を通じてみえてきた自己変容を促す場づくりをするうえでの4要素のうち（図1参照）、その効果が明らかになった3要素、①対話の対象となる素材（Material）、②対話の方法（Method）、③対話に臨む態度（Mindset）、を提案する。

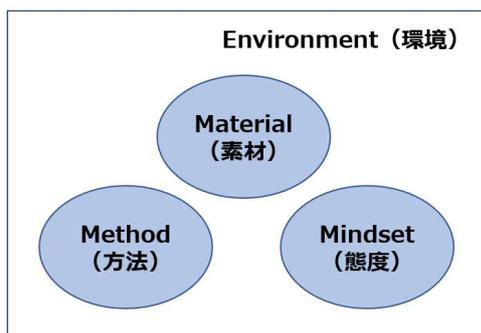


図1 効果的な対話の場のための4要素

2. 対話の場で扱うものとは

対話の定義は多義にわたり、例えば、「対話とは互いに相手に応答して話し合いながら、新たな意味を生み出すことにある」⁽²⁾、「人間的な経験という、並外れて広い範囲を探るプロセスである」⁽³⁾、「その後の思考や行動を支える新たな理解や態度、またそれを支える文脈を探求して生み出し、協働行動を行うことを目指すものである」⁽⁴⁾など多様である。本稿

ではこれらを踏まえ、対話の定義を「応答を通じた新たな理解と意味の探究」とする。

ここで、対話の対象を明確にしたい。対話の定義は明確になったものの、その対象は限定されていない。しかし明確でないことが、ときに対話の場に誤解や偏見を生み、期待すべき成果を得られないことに繋がる。ここで、対話をする対象となる素材を図2に示す。

知	知識、知恵 考えたり、思いついたこと
情	感情、情動 気持ちの揺れ動き
意	意志、意欲 価値観、信念、思い

図2 対話の対象となる素材（Material）

対話によって真理を見出す問答法とは、「知」を対象とした対話であり、結果として新たな知識や知恵を生み出すものである。また紛争解決や対立における相互理解とは、お互いの感情を分かち合い、理解しあえた結果、生まれてくるものである。そして、協働行動や共創に向けてのより深い共感や共鳴を起こすのは、自分の根幹にある価値観や信念を分かち合えた時となる。もちろん、対話の中では3つの領域すべてを同時に扱うことになるが、対象に区別があり、違いがあることを理解しておくことで、参加者の対話の場への理解はより豊かになり、効果を生みやすくなる。

3. 対話をどのように進めるべきか

対話の進め方もいくつかの方法論が提示されているが、OICではアイザックスが提唱する4つのふる

まい⁽⁴⁾をベースにしている。①listening：聴く（邪魔せず抵抗せず、ただ聴く）、②respecting：尊重する（誠実さを持ち全身で受け取る）、③suspecting：保留する（評価判断せず想定を持たない）、④voicing：声を出す（心からの真実の声をだす）

しかし、これを参加者にそのまま伝えても、日常の立場や一般常識、隠れた自尊心などが、素直な気持ちや考えを表出させることに抵抗をする。したがって、自分の気持ちや考えを自然と場に対して表出できるようにするため、図3のようにその方法を規定した（図3）。「とりあえず」「真ん中（場）に」を設定することで、普段の思考・行動パターンにとらわれず、また人の目や常識を気にせずに声を出しやすくなる。また「感じたことを出す」は主観でしかなく、他者からの評価判断を気にせずに扱いやすくなる側面もあり、また主語を私にして話しやすくなる、といった効果も期待できる。こうすることで、素直な思いを、当事者として場に出すことができ、より効果的な対話を生み出すことになる。

とりあえず：考えず、取り繕わず、出てきたままを
真ん中(場)に：場を通じた共有、誰かにぶつけない
感じたことを出す：思考よりも感情、主語を「私」に

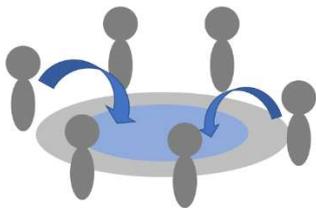


図3 対話における発話の方法 (Method)

4. どのような態度で対話に臨むべきか

対話とは、専門家だけができるものではなく、世界中の誰もがができる、古来よりある普遍的な方法である。しかし、その場をより効果的にするうえで、その場に参加する一人ひとりの態度は重要である。ここで、対話の場をより効果的にするための態度を挙げる（図4）。

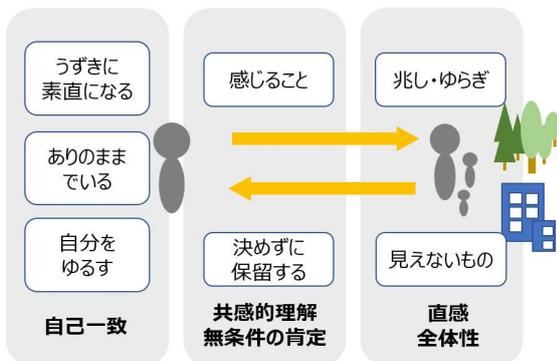


図4 対話の場に臨む態度 (Mindset)

一番の起点となるのは、ありのままの自分自身である。そしてその根底には、自分に起きた過去のことを含め、すべての自分をゆるすことである。そのうえで、自分の内側から湧き上がるものに素直にすることで、自分の思いと言動が一致し、自然で自分らしい自分で居られることになる（＝自己一致）。

そのうえで、思考にとらわれず、評価判断を保留しながら、感じたものをそのまま受け止める。そうすることで、相手から出てきたものをゆがめず、とらわれずに受け取ることができる（＝共感的理解、無条件の肯定）。

場を通じて起こることは、世界に起こることとの相似形でもあり、物事は必ず変化し続けているので、全体の中に潜む変化をとらえることで、その場その人に必要なことを超えて、必要なものが見つかるようになるのである（＝直感、全体性）。

5. まとめ

対話を用いて自己変容を生み出す学習プロセスを促進するうえで、より効果的な場づくりをするために必要な3つの要素、①対話の対象となる素材 (Material)、②対話における発話の方法 (Method)、③対話の場に臨む態度 (Mindset)、を明らかにした。今後は、対話の場全体を規定する環境要素の構造も明らかにしたうえで、対話全体のメカニズムのさらに研究したい。

参考文献

- (1) 中村一浩, 保井俊之, 菊野陽子, 林亮太郎, 前野隆司: “対話 (ダイアログ) とデザイン思考を用いた人材育成・コミュニティ形成・事業創造 - OIC (Obuse Incubation Camp) / OIS (Obuse Innovation school) の試み -”, 地域活性学会, Vol.8, pp.11-20 (2016)
- (2) ヤーコ・セイックラ, トム・エーリック・アーンキル, 高木俊介・岡田愛訳: “オープンダイアログ”, 日本評論社 (2016)
- (3) デヴィット・ボーム, 金井真弓訳: “ダイアログ: 対立から共生へ、議論から対話へ”, 英治出版 (2007)
- (4) Isaacs, W.: “Dialogue: The Art of Thinking Together”, New York: Crown Business (1999)